
閉ざされた裏

紅佐洲仮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉ざされた裏

【Nコード】

N4136E

【作者名】

紅佐洲仮

【あらすじ】

杯戸公園で一人の男性が殺された。警視庁は殺人事件として捜査を始める。しかし、数日後に捜査は中止になった。それからその男性の家族が毛利探偵事務所に来て来る。依頼の内容は殺人事件の捜査だった。小五郎はその依頼を受け、調査を始める。コナンもその依頼の調査を始める。そして、偶然同じ事件を追っていた服部平次と再会する。しかし、事件の調査しているコナン達が次々と襲われる。更に、怪盗キッドも事件に関わっていく。一体、何故狙われるのか？警視庁が捜査を中止した事と関係があるのか？一つの殺人

事件が巨大な事件なり始める。閉ざされた裏には一体どんな真相が待っているのか？組織との戦い長期シリーズ第一部！

序章　　プロローグ

深夜の公園は不気味に感じる。同じ公園なのに昼と夜とはこんなにも雰囲気が違う。風で揺れる木が恐怖感を呼ぶ。

「うわあああああ…。」

深夜の公園に悲鳴が聞こえた。

「やったな…。」

死体を見ている一人がそう言った。

「ああ…。」

もう一人の手にはナイフが握られていた。

「けど、まさかこんな奴に知られるとは…。」

死体を見ていた一人が言った。

「…行くぞ。」

ナイフを持っていた一人がそう言い終えると、歩き出した。もう一人も歩き出した。二人は闇の街に消えて行った。

第1章 〈現場検証〉

翌日、杯戸公園に警視庁捜査一課の目暮警部達がやって来た。

「免許証によりますと、被害者は山江琢磨さん32歳…会社員です。」

高木刑事が被害者の免許を見ながら答えた。

「死因は胸を刺された事か…。」

目暮警部が死体を見ながら言った。

「検死官の話だとナイフみたいな物で刺されたみたいです。」
高木が目暮に報告した。

「高木君、死亡推定時間は何時なんだね？」
目暮が高木の方を見ながら尋ねた。

「死亡推定時間はちょうど深夜の0時ぐらいだそうです。」

「深夜に公園か…。」
目暮が独り言の様に呟いた。

「一応、聞き込みはしてるんですが…犯行が深夜なので目撃者は居ないかと…。」

「引き続き聞き込みは続けてくれ。それと、被害者の会社と家族に知らせるんだ。」

目暮は高木に言った。

「分かりました…。」
高木はそう答えた。

「今朝、杯戸公園で男性の死体が見つかりました。警視庁では殺人事件として捜査しています。」
アナウンサーが杯戸公園で中継をしている。

「また、殺人事件だね…。」
蘭がテレビを見ながら言った。

「最近、多いな。この前も殺人事件のニュースをやってたな。」
小五郎がコップに入ったお茶を一口飲んだ。

「（確かにな…。）」
コナンは小五郎に同感した。

「本当に怖いね…。ねえ、コナン君。」

蘭がコナンに尋ねた。

「うん、そうだね…。」

「それより、早く学校に行った方が良いんじゃないか？」
小五郎がテレビの方に視線を向けている。

「あ、もうこんな時間…。」

蘭が時計を見ながら言った。

「コナン君、行こう。」

「うん…。」

コナンは笑顔で言った。

第2章 〈日々の日常〉

帝丹小学校のチャイムが鳴る5分前に1年B組の教室のドアが開いてコナンが教室に入った。

「（ギリギリ間に合ったみてえだな。）」
コナンが時計を見ながら言った。

「あ、コナン君おはよう。」
歩美がコナンに気付いて挨拶した。

「コナン君、おはようございます。」
歩美に続いて光彦が挨拶した。

「よお、コナン。」

元太が手を振りながら言った。

「よお、オメーら。」

コナンはそう言い、歩美達に近付いて言った。

「危なかったですね。」

光彦がコナンに言った。

「もうすぐで遅刻だったぜ。」

元太が次にコナンに言った。

「昨日、夜遅くまで本を読んだからな…。」

「あら、また血生臭い推理小説を読んだのかしら？」
コナンの横から哀が尋ねた。

「……………」

コナンが黙って不機嫌そうな顔をした。

「駄目だよコナン君、夜更かしは…。」

歩美がコナンに言った。

「母ちゃん言ってたぞ。寝る子は育つて…。だから、俺は一杯寝てるぜ。」

元太が自慢する様に言った。

「……………」

コナンは苦笑いをした。その時チャイムが鳴り、コナン達は自分の席に着き始めた。それから小林先生が教室に入って来た。

「みんなおはよう…。」

小林が教壇に立って挨拶した。

「おはようございます。」

生徒達が大きな声で挨拶した。

「じゃあ、名前を呼んで行くので大きな返事をして言って下さい。」
小林が出席簿を開きながら言った。

第3章 〈休み時間〉

警視庁捜査一課では杯戸公園で起こった殺人事件を捜査している。
目暮は椅子に座って被害者の遺留品の写真を見ていた。

「目暮警部…。」

高木が目暮に近付いて来た。

「どうしたんだね？高木君…。」

目暮は顔を上げて高木に尋ねた。

「被害者のご家族がお見えになりました。」

「そうか…。」

目暮はそう言い、椅子から立ち上がった。

「じゃあ、2時間目は此処で終わります。3時間目は算数なので教

科とノートを机に出しといて下さい。」

小林はそう言い、教科から出て行った。小林が出て行ってから生徒達の声が教室に響く。コナンはその声を聞きながら大きな欠伸をした。

「そうとうな寝不足の様ね。」

コナンの横で雑誌を読んでいる哀が言った。

「しょうがねえだろう、つつい面白くて…。」

「（何処が面白いのかしら？ 血生臭い推理小説なんて…。）」
哀は雑誌を読みながら少し考えた。

「ねえねえ、哀ちゃんとコナン君、学校が終わったら公園で遊ぼ。」
歩美がコナンと哀に提案した。

「ああ…、良いぜ。」

「ええ…。」

「何して遊びますか？」
光彦がコナン達に尋ねた。

「野球しようぜ…。」
元太がそう提案した。

「じゃあ、野球をしましょう。」
光彦が元太の提案に賛成した。

「コナン君と哀ちゃんも野球で良いよね？」

「ああ…、構わないぜ。」

「私も良いわよ…。」
コナンと哀も賛成した。

「じゃあ決まりだね。」
歩美が嬉しそうに言った。

第4章 く公園で……

警視庁の少し小さな部屋で目暮と高木、そして被害者……山江琢磨の家族が事件の事で話している。

「主人はどうして殺されなければいけなかったんですか？」

山江琢磨の妻、山江美香が泣きながら尋ねた。

「……………」

目暮と高木は何も答えられなかった。美香の横には娘の大学生の山江香織が座って居る。その横には香織の兄の山江優太が座って居る。

「父は何故、公園なんかに住たんですか？」

優太が美香に代わって目暮に尋ねた。

「まだ、捜査を始めた段階なので何も分かってません。」

目暮が優太に言った。

「琢磨さんは人から恨まれる人なんですか？」

高木が優太達に尋ねた。

「お父さんはそんな人じゃありません。真面目で優しくいお父さんでした。」

今度は香織が答えた。

「最近、琢磨さん変わった様子とかはありませんでしたか？」
高木が美香達に尋ねた。

「いえ、普通でした。」

美香が涙をハンカチで拭きながら答えた。

「琢磨さんが勤めている会社は何処ですか？」

「主人は東都オフィスカンパニーに勤めています。」

「東都オフィスカンパニーって大企業 of 会社ですね。」

高木が少し驚いた表情を見せた。

「ええ…。」

美香は少し俯きながら言った。

放課後になり、コナン達は米花公園で野球をやっていた。

「コナン、そっちに行ったぞ。」

元太の声が大きく聞こえて来た。

「へいへい…。」

コナンは面倒くさそうに言った。コナンは落ちて来るボール見ながらキャッチする体制をとった。そして、ボールはコナンのグローブに入った。

「コナン君、投げて下さい。」

光彦の声が聞こえて来た。コナンはボールを光彦の方に向けて投げた。

「（あんまり遠くに飛ばすなよ。）」

コナンは心の中でそう思った。

第5章 〈東都オフィスカンパニー〉

翌日、高木と佐藤は東都オフィスカンパニーにやって来た。東都オフィスカンパニーは30階もある会社で、海外にも進出している大企業だ。

「流石、大企業ですね…。」

東都オフィスカンパニーのビルを見上げながら高木は言った。

「有名な会社だしね。」

佐藤がさらりと言った。

「おい、お前達此処で何してる？」

高木と佐藤が会話をしている時に誰かが話し掛けて来た。高木と佐藤は話し掛けて来た方を見た。

「「中森警部…。」」

高木と佐藤は同時に言った。高木と佐藤の目の前には警視庁捜査二課の中森警部が立っていた。

「中森警部がどうして此処に居るんですか？」

高木が中森に尋ねた。

「それはこっちのセリフだ。何で、目暮の部下が此処に居るんだ？」
高木の質問に答えず、中森が高木と佐藤に尋ねた。

「殺人事件の捜査よ。知ってるでしょ…？ 杯戸公園で男性が殺された事…？」

佐藤が高木の代わりに説明した。

「ああ…、あの事件か。」

中森が思い出しながら言った。

「それで、中森警部はどうして此処に？」

今度は佐藤が中森に尋ねた。

「怪盗キッドが予告状を出したんだ。」

「キッドがですか…。」

高木がそう呟いた。

「ああ…。東都オフィスカンパニーの会長が所有する『Blue Moon』って言う宝石を盗みに来るんだとよ。」

「へえ…。」

佐藤が腕を組みながら言った。

「中森警部…。」

中森に刑事が近付いて来た。

「どうした…？」

中森は刑事の方を見た。

「全員集まりました…。」

「そうか…。じゃあ、配置に付くように言っておけ。」

「わかりました…。」

刑事はそう言い、走って何処かに行った。

「高木君、私達も行きましょう。」

佐藤が高木に言った。

「はい：。」

佐藤と高木はビルの入口に向かって歩き出した。

第6章　く表と裏く

高木と佐藤は中森と別れて東都オフィスカンパニーのビルの中に入った。ビルの中には沢山の人が忙しそうに歩いている。高木と佐藤はビルのカウンターに向かって歩き出した。

「すみません、警察の者ですが…。」
佐藤がカウンターに近付いて、カウンターに居る社員に警察手帳を見せた。

「刑事さんが何か御用ですか？」
社員が佐藤に尋ねた。

「殺害された山江琢磨さんの事件でちょっと話を聞きたくて…。」
佐藤が社員に言った。

「分かりました、少しお待ち下さい。」

社員はそう言い、何処かに電話を掛け始めた。

それから5分ぐらい経ってから高木と佐藤に一人の男性が近付いて来た。

「刑事さん達ですよね？」

男性が高木と佐藤に尋ねた。

「ええ…。」

「私は山江琢磨の上司の田部真也と言います。」

田部はそう言い、名刺を佐藤に渡した。

「私は佐藤と言います。こちらは高木です。」

「初めまして…。」

高木は田部にそう言った。

「話は山江の事でしたよね？」

「はい、そうです…。」

佐藤が田部の質問にそう答えた。

「山江は優秀な社員でしたよ。部下が困っていたら助けたりして、思いやりのある社員でした。」

「最近、山江さん変わった様子はありませんでしたか？」

高木が田部に尋ねた。

「いえ…、何時もと変わらず普通でした。この前も部下達と一緒に飲みに行きましたし、お酒を楽しそうに飲んでました。」

「この前って何時ですか？」

佐藤が田部に尋ねた。

「一週間前です。場所は杯戸駅の近くにある居酒屋です。」

「じゃあ、山江さんから何か相談されたりとかされませんでしたか？」

今度は高木が田部に尋ねた。

「いえ…。もしかしたら、川森君なら何か知ってるかも知れません。川森君は山江君と同期に入社していたり仲良しですから…。」

田部が思い出しながら言った。

「じゃあ、直ぐにその人を呼んで下さい。」

佐藤が田部にそう言った。

「分かりました…。」

それから数分が経って田部が川森を連れて来た。

「川森宏です…。」

川森は名刺を佐藤に渡した。

「じゃあ、私は仕事があるので…。」

田部はそう言い、仕事場所に戻る為に何処かに走って行った。

「山江の事で話があるって…。」

「ええ…、川森さんが山江さんと仲が良かったと田部さんから聞きまして…。」

佐藤が川森にそう言った。

「山江とは同期で入社して以来ですから、あいつが亡くなって残念です。」

川森は少し残念そうな顔をした。

「最近、山江さん変わった様子とかありませんでしたか？」
高木が川森に尋ねた。

「いえ、そんな様子じゃありませんでした。」

「そうですか…。」

「あ、でも、この前あいつと酒を飲んだ時、変な事を言っていました。」

川森が思い出した様に言った。

「え、何ですか？」

高木が食いつく様に尋ねた。

「確か…、『表ならいくらでも知る事が出来る。裏は知る事も見る事も出来ない。けど、俺は裏を知ってしまったかも知れない』って言ってました。」

第7章 〈手掛かりのない捜査〉

「何ですか？裏を知ってしまったって？」

高木が不思議そうな顔をしながら尋ねた。

「それは私にも分かりません。私もあいつに尋ねたのですが、教えてくれませんでした。」

川森は高木の質問にそう答えた。

「それ以外で何か気付いた事がありますか？」

佐藤が川森に尋ねた。

「いえ…、ありません。」

「そうですか…。」

「あの…、そろそろ仕事に戻っても良いですか？」

「ええ…。」

佐藤は了承した。

「刑事さん、あいつを殺した犯人必ず捕まえて下さい。」

川森はお辞儀をして高木と佐藤から離れて行った。その途端、高木の携帯が鳴った。高木は携帯をポケットから出して電話に出た。

「はい、高木です…。」

高木は電話相手に言った。

「千葉だけど…、そっちは何か分かったか？」

電話相手は同僚の千葉刑事だった。

「いや…、手掛かりになりそうな事は分らなかったよ。そっちはどうだ？」

「山江さんの家の中を探してるんだけど、こっちも手掛かりは見つかってない。」

「そうか…。千葉、何か分かったら連絡してくれ。」

「ああ…。」

千葉はそう言い、電話を切った。電話が切れた事を確認してから高木は携帯をポケットに入れた。

「電話、千葉君から？」

佐藤が高木に尋ねて来た。

「はい、あっちも手掛かりは見つからなかったみたいです。」
高木は佐藤にそう言った。

「そう…。とにかく一度、本庁に戻りましょう。」
佐藤は高木に提案した。

それから一週間が経った。目暮達は事件の捜査をしているが事件に関する手掛かりは全く見つかってない。そんな中、目暮は警視庁捜査一課の管理官…、松本清長に呼び出された。

「何ですか？管理官…。」

目暮は松本に尋ねた。

「実は…。」

松本はゆっくりと口を開いた。

「え？どういう事ですか？」

美香は誰かと電話をしている。

「ちょっと待って下さい。」

美香は電話相手にそう言ったが電話相手は電話を切った。

「どうしたのお母さん？」

香織が美香に尋ねた。

「刑事さんが…、刑事さんが…。」

美香の瞳には涙が浮かんでいる。

第8章　く依頼人く

毛利探偵事務所ではコナンと蘭が掃除をしている。小五郎は椅子に座って新聞を読んでいる。

「…する事ねえな。」

小五郎が独り言の様に呟いた。

「最近、依頼ないからね。」

蘭が窓を吹きながら言った。

「（確かなに…。この一週間は依頼はなかったからね。）」

コナンは心の中でそう思った。

「じゃあ、出掛けて来るか。」

小五郎は椅子から立ち上がった。

「出掛けて来ても言いけど、麻雀や競馬は駄目だからね。」

蘭が小五郎に忠告した。

「お、おう、分かってる。」

小五郎は曖昧に言った。

「（…凶星だな。）」

コナンは苦笑いをした。

ピンポーン…、

その時、探偵事務所のベルが鳴った。

「誰か来たみたいだね。」

コナンが最初にそう言った。

「はい、今開けます。」

蘭はそう言い、事務所のドアを開けた。

「あー、此処は毛利探偵事務所ですよね？」

ドアから女性の声が聞こえて来た。

「はい、そうです。どうぞ入って下さい。」

蘭は女性を中に招いた。

「…先ずは名前を教えて貰えますか？」

小五郎はソファーに座り、向かいに座る女性に尋ねた。コナンと蘭は小五郎の後ろで立っている。

「私の名前は山江美香と言います。」
女性 は 山江美香 と 名乗った。

「美香さん、私に用件とは？」

「実は毛利さんにある事件を捜査して欲しいんです。」

「ある事件って…？」

「杯戸公園で起こった殺人事件です。」

「杯戸公園って…。」

「ニュースでやってた事件だね。」

小五郎が言う前にコナンがそう言った。

「しかし、何故その事件を私に…？」

小五郎が美香に尋ねた。

「その事件で殺された人が…、私の主人なんです。」

「え…？」

小五郎は少し驚いた。

「けど、美香さん。殺人事件なら私に頼まなくても警察が動いてるんじゃないんですか？」

「その警察が捜査を中止したんです。」

「……………！」

コナン達はその言葉に驚いた。

「だから、名探偵の毛利さんにしか頼む人が居ないんです。」

「…分かりました。その依頼、お受けしましょう。」

「ありがとうございます。」

美香は頭を下げて言った。

第9章 く関係のない事く

山江美香は住所と携帯電話の番号を書いた紙を小五郎に渡し、探偵事務所を出る前に一度お辞儀をしてから帰った。蘭は美香に出したお茶を片付けている。

「変だよな…。」

小五郎が煙草を吸いながら呟いた。

「え、何が…?」

蘭が小五郎に尋ねた。

「警察が捜査してない事だ。殺人事件なら捜査する筈だし、あの事件は解決していないのなら捜査を続けてる筈だからな…。」

「（おっちゃんの言う通りだ。事件が解決していないのに捜査を中止するのは変だ。あの事件が起こってからまだ、余り日が経っていない。）」

コナンは腕を組みながら考えた。

「何か理由があるんじゃないの?」

蘭が小五郎に尋ねた。

「ねえ、明日警視庁に行ってみようよ。」

コナンが小五郎に提案した。

「そうだな…。何か分かるかも知れないしな。」

小五郎はその言った。

翌日、コナンと小五郎は警視庁に来ていた。

「…ったく、何でお前までついて来るんだ？」
小五郎は不満そうにな顔をした。

「今日は学校休みだし、暇だから…。」

コナンは子供の様な笑顔を見せた。

「邪魔するんじゃないぞ。」

「はい。」

コナンは笑顔で答えた。

「毛利君、今日はどうしたんだね？」

コナンと小五郎に目暮が近付いて来た。

「警部殿、忙しい時に呼び寄せてすみません。」

「いや、構わんよ。それで、今日はどうしたんだね？」

目暮はもう一度小五郎に尋ねた。

「実は依頼で、ある事件を調べる事になったんです。」

「ある事件ってなんだね？」

「杯戸公園で起こった殺人事件です。」

「……………」

目暮の顔が陰しくなった。コナンはその顔を見逃さなかった。

「その事件の事、教えて貰えませんか？」

「悪いが毛利君、その事件の事は何も話せんよ。」

目暮が小五郎に口走った。

「捜査を中止したから話せないんですか？」

小五郎が目暮に尋ねた。

「…これは我々警察の仕事だ。警察を辞めた君には関係のない事だ。」

目暮はそう言い、コナン達から離れて行った。

第10章　　山江家

警視庁で事件の事が聞けなかったコナンと小五郎は警視庁を出て歩いている。

「今日の警部殿は様子がおかしかった。」
小五郎が歩きながら言った。

「（おっちゃんが杯戸公園で起こった殺人事件の事を目暮警部に尋ねた時、目暮警部の表情が険しくなった。それに、目暮警部がおっちゃんにあんな事は言わなかった。あの表情からすると、目暮警部は何かを隠している。捜査を中止した事と関係あるのか？）」
コナンは歩きながら考えた。

「とにかく、山江さんの家に行って詳しい話を聞かか。」

「うん、そうだね…。」
コナンはそう言った。

探偵事務所のベルが鳴った。蘭はドアを開けた。

「あら、皆どうしたの？」

ドアの前には歩美、光彦、元太、哀が立っている。

「こんにちは蘭お姉さん。」

歩美が蘭に挨拶した。

「コナン君、居ますか？」

光彦が蘭に尋ねた。

「ごめんね、コナン君居ないのよ。」

蘭が優しく謝りながら言った。

「何処かに行ったの？」

歩美が蘭に尋ねた。

「お父さんと警視庁に…。」

「また、事件を追ってるんですかね？」

光彦が蘭に聞こえない様に尋ねた。

「あいつまた、抜け駆けかよ。」

元太が光彦の質問に答えた。

「（忙しい探偵さんね…。）」

哀は呆れながらそう思った。

コナンと小五郎は鳥矢町にある山江美香が住む家を訪れていた。

「すいません、急に家に伺って…。」
小五郎が謝りながら言った。

「いえ、大丈夫ですよ。」
美香がコーヒーが入ったカップを小五郎の近くに置き、ジュースが入ったコップをコナンの近くに置いた。

「今日、此処に来る前に警視庁に行ってきましたが、事件の事は話して貰えませんでした。」

「そうですか…。」

少し残念そうに言った。

「今日、此処に来たのは被害者の事を詳しく聞く為に来ました。」

「杯戸公園で亡くなったのは私の主人で山江琢磨って言います。」

「琢磨さんが公園に何しに行ったか分かりますか？」

「いえ…。」

美香は首を振りながら言った。

「最近、琢磨さんに変わった様子とかありませんでしたか？」

「普通でした。普通に会社に行き、家でも普通でした。」

「そういえば…、琢磨さんは何処で働いて居たんですか？」

小五郎が不意に思いながら尋ねた。

「主人は東都オフィスカンパニーに働いてました。」

「東都オフィスカンパニーってあの大企業の…。」

「ねえ、琢磨さんが変な事とか言ってなかった？」

コナンが美香に尋ねた。

「いいえ…。」

「美香さん、警察に話を聞かれましたね？」

今度は小五郎が美香に尋ねた。

「はい…。」

「何を聞かれましたか？」

「主人の事や会社の事や家の事だけです。捜査の内容は教えて貰えませんでした。」

「そうですか…。」

「もしかしたら、川森さんなら何か知ってるかも知れません。」
美香が思い出しながら言った。

「誰ですか…？」

「東都オフィスカンパニーで働いて居る人です。主人と同期で会社に入って良くお酒を飲んだり、家に遊びに来たりしてます。この前も杯戸駅の近くの居酒屋に川森さんや会社の人とお酒を飲みに行ってます。」

「その人の住所とか分かりますか？」

「はい、分かります。少し待ってて下さい。」

美香はそう言い、近くにあった紙で住所と電話番号を書いた。

「これが川森さんの住所と電話番号です。」

美香は小五郎に紙を渡した。

第11章　　第二の殺人

静寂な夜に強い風が吹く。静かなる夜の空には満月が輝いてる。とあるビルの屋上で怪盗キッドが立っている。キッドはビルから見える美術館を見ている。美術館には警察が沢山集まっており、美術館の周りの空にはヘリコプターが何台も飛んでいる。

「今回も楽勝だったな…。」

キッドは不敵な笑みを美術館の方に向けた。

「さてと…。」

キッドはポケットから盗んだ宝石を出した。その宝石を月に向けた。

「今回もハズレか…。」

キッドは残念そうに言った。その時、キッドの後ろに誰かが立ち止まった。キッドはそれに気づき、後ろを振り向いた。そこには拳銃を構えて目出し帽で顔を隠した二人が立っている。

「…警察の方ではありませんね？」

キッドが最初に口を開いた。

「ああ…、そうだ。」

拳銃を構えた一人が答えた。

「じゃあ、私に何か御用ですか？」

「お前に死んで貰おうと思ってな。」
拳銃をキッドに向けた。

「何故、私を殺すのですか？」

キッドはポーカーフエイスを崩さず尋ねた。

「今から死ぬ人間に関係ないだろう。」

「：では、死ぬ前に私のマジックを見て頂きます。」
キッドはそう言い、右手を横に上げた。

「：Three、Two、One。」

キッドがカウントした途端、キッドの周囲が眩しい光りに包まれた。

「なんだ：！？」

眩しい光りのせいで目が開けられない。

「目が開けられない：。」

手を目に当てながら言った。数秒してキッドの周囲の光りは消え、拳銃を構えた二人が辺りを見回した。

「くそ：、逃げられた。」

辺りにはキッドの姿はなかった。

コナンと小五郎が山江家を訪れてから二日経った。小五郎は美香から教えてもらった川森と言う人に会う為、賢橋町に来ていた。

「確か…、この辺りのマンションだったな。」

小五郎は辺りを見回しながら歩いている。その時、小五郎の目の前に目的のマンションが見えて来た。

「あのマンションだな…。」

小五郎は歩くスピードを上げた。

川森宏の部屋は5階だ。小五郎はエレベーターで5階にやっと来た。

「502…、此処だな。」

小五郎は確認しながら言った。そして、小五郎は部屋のインターホ

ンを押した。

ピンポーン…、

インターホンを押しても川森が出て来る様子なかった。

「（出掛けてるのか…。）」

小五郎はそう思いながらも一度、インターホンを押した。

ピンポーン…、

しかし、川森が出て来る様子なかった。

「（また、後で来るか。）」

小五郎は諦めて立ち去ろうとした時、川森の部屋から携帯電話の着信音が鳴り響き始めた。その着信音はずっと鳴り響いてる。小五郎の頭には嫌な予感がして来た。

「川森さん、川森さん…。」

小五郎はドアを何度も叩いた。しかし、返事はなかった。小五郎は部屋のドアノブに手を掛けた。部屋は鍵が掛かっておらず、ドアが開いた。小五郎はやむを得なく部屋に入った。

「川森さん居ますか…。」

小五郎は廊下を歩き、一番奥の部屋のドアを開けた。

「……………！」

小五郎はその瞬間、驚いた。目の前には一人の男性が倒れていた。

第12章　　追撃者

小五郎が携帯で電話をして、目暮警部達がマンションにやって来た。

「被害者の名前は川森宏さん。33歳です。」

高木が目暮に報告した。

「それで、死因は…？」

「死因は鋭利な刃物で刺された事により失血死です。」

高木が目暮に報告した。

「…で、第一発見者は？」

目暮は死体から目を離しながら尋ねた。

「それが…。」

高木は言葉を止め、部屋の玄関の方に目を移した。

「毛利君か…。」

目暮も玄関の方に目を移した。

「はい…。」

「高木君、毛利君を外に出すんだ。」

「分かりました…。」

高木は目暮にそう言った。

「おい、どういう事だ？」

小五郎が部屋から追い出され、高木に尋ねた。

「これから現場検証なので、部外者は入ってもらったら困るんです。」

高木が小五郎を説得するように言った。

「俺は第一発見者だぞ。聞きたい事があるんじゃないのか？」

「事情聴取は後でしますので待って下さい。」

高木はそう言い、部屋に入って行った。

現場検証が終わり、目暮は小五郎に二三質問して事情聴取は終わった。小五郎は事件の事を聞こうとしたが、目暮は何も答えてくれなかった。小五郎は仕方なく、現場のマンションから離れて探偵事務所に帰る為に歩いている。

「何で警部殿は何も話してくれないんだ。」

小五郎が不満を言いながら歩いている。その小五郎の後ろを怪しい車がゆっくりと動きながら小五郎の後をつけてる。

「一体、警部殿に何があったんだ？」

小五郎は頭の中で考えた。その時、小五郎をつけてた怪しい車がスピードを上げて小五郎に近付いて来た。

「……………！」

小五郎は後ろを振り向き驚いた。車はスピードを緩める事なく、小五郎に近付いて来た。小五郎は走って近くの脇道を曲がった。車はスピードを緩める事なく、走って行った。

「何だ、さっきの車は…。」

小五郎は息を切らしながら言った。

第13章 くコナンの捜査く

「え、川森さんが殺されたって本当？」

学校から帰って来たコナンが小五郎から聞いて驚いた。

「ねえ、お父さん。その川森さんって誰なの？」

蘭が小五郎に近付いて尋ねた。

「山江美香さんの御主人と同じ会社の社員だよ。」

「そうなんだ…。」

蘭が納得した様に言った。

「警察の人は何て言ってたの？」

コナンが小五郎に尋ねた。

「何も話してくれなかった。目暮警部殿もな…。」

「……………」

コナンは黙って何かを考えていた。

翌日、コナンは川森さんが住んでいたマンションに来ていた。

「（此処が事件現場のマンションか……。）」
コナンは事件現場のマンションの中に入って行った。マンションの中に入り、コナンはマンションの管理人が居る場所に向かった。

「ねえ、おじさん。」

コナンは幼い笑顔を見せながら管理人を呼んだ。

「ん、何だい？坊や。」

管理人はコナンの方を見て尋ねた。

「昨日、此処で事件があったんでしょ？」

「ああ、警察が来て大騒ぎになったよ。」

「警察の人は何か言ってなかった？」

コナンは管理人に尋ねた。

「別に、何も言ってなかったな。」

管理人は思い出しながら言った。

「じゃあさ、事件があった日に怪しい人とか見なかった？」

コナンは質問を変えて尋ねた。

「怪しい人か…。そういえば、帽子とサングラスを掛けた二人の男がマンションに入って行ったな。あんな二人、マンションに住んでなかったし…。」

「ねえ、それ昨日の何時頃？」

コナンの表情が変わった。

「確か…、夜の11時ぐらいだったな。」

「（夜の11時か…。その二人組が犯人かも知れねえな。）」

コナンは頭の中で考えた。

「教えてくれてありがとう。」

コナンはそう言い、マンションから出て行った。

事件現場のマンションを出たコナンは警視庁の目の前に来ていた。

「やっぱり事件の事は目暮警部に聞かないとな…。」

コナンはそう言い、警視庁に入ろうと歩き出した。その時、警視庁から高木が出て来た。

「（あ、高木刑事…。事件のこと聞いてみるか。）」

コナンはそう思い、高木に近付こうとした時、高木の目の前に誰かが立ちはだかった。

「（え…？）」

コナンは驚いて立ち止まった。

「…待ってたで。」

高木の目の前に立ちはだかった人物が言った。

第14章 く西の探偵く

「待ってたで……。」

高木の目の前に立ちはだかった人物がそう口走った。

「服部君……。今日はどうしたんだい？」

高木は目の前に居る平次に尋ねた。

「あんたに聞きたい事があるんや。」

「なんだい？聞きたい事って……。」

「この前、杯戸公園で起こった事件のことや。あの事件、捜査したんはあんたら捜査一課やろ？何で捜査を中止したんや？あの事件、まだ解決してへんやろ？」

平次が追求する様に高木に尋ねた。

「……………」

高木は険しい表情をしながら何も答えなかった。

「おい、聞いてんのか？」

「……君には関係ない事だ。あの事件には首を突っ込まないでくれな
いか。」

高木はそう言い終えると、平次から離れて何処かへ走って行った。

「なんも話してくれへんかったか…。」

平次は溜息を尽きながら残念そうに言った。

「当たり前だろう…。オメエ、部外者なんだから。」

平次の後ろからコナンの声が聞こえて来た。

「え…?」

平次は少し驚きながら後ろを振り向いた。

「工藤やんけ…。こんな所で何してんや?」

平次は嬉しそうな声でコナンに尋ねた。

「それはこっちの台詞だ。オメエこそ何してんだ?」

「事件の依頼や…。」

平次はコナンにそう言った。

「へえ、お前もあの事件を追ってるのか。」

コナンと平次は警視庁から離れて探偵事務所に向かって歩いていった。

「そうや。大滝ハンから頼まれてな。」

コナンの横を歩く平次がそう言った。

「…で、何でお前も事件追ってるんや？」

「杯戸町で殺された被害者の奥さんから依頼があって捜査してるんだ。それで、事件のことを目暮警部に聞こうとしたけど…」

「何も話してくれへんかったって事か…」

「ああ…」

「けど、変やないか？あの警部ハンは今まで俺達が事件に関わったら捜査内容教えてくれた筈やで…。それに、あの事件はまだ犯人が捕まってないのに捜査を止めるなんてなんかあるんとちゃうか？」

「…かも知れねえな。警視庁にとって部外者には言えない事が…。」
コナンは真剣な声で答えた。コナンと平次は考えながら探偵事務所に向かっていった。コナンと平次の様子を隠れて何者かがじっと見ていた。

第15章　　〱 捜査開始 〱

「服部君、何時東京に来たの？」

事務所に帰って来たコナンが平次を連れて来た事に蘭が少し驚いた顔をした。

「最近や…。ちょっと事件の依頼でな。」

平次が蘭に説明した。

「あれ…？今日は和葉ちゃんと一緒にじゃないの？」

「あいつも来る予定やったんやけど、熱が出て来られへんかったんや。」

「へえ、そうなんだ。」

「まあ、事件が解決出来るまで此処に泊めてもらうで…。」

平次はそう言い、事務所のソファに座った。

「お父さん良いよね？」

蘭が小五郎に尋ねた。

「ああ…、それより何の事件の依頼なんだ？」
新聞を読んでいる小五郎が尋ねた。

「あんたが追ってる事件と一緒にや。」

「杯戸公園で起こった事件を追ってるのか？」

「ああ…、そうや。…で、おっさんの方はなんか分かってるんか？」

「いや…、何も分かってない。」

小五郎が素っ気なく答えた。

「そうか…。まあ、なんか分かったら教えてくれや。」

「ああ…、分かったら教えてやるよ。」

小五郎は平次にそう言った。

翌日、コナンと平次は朝から探偵事務所を出て、ある場所に向かっていた。

「…で、どこ行くんや？」

コナンの横を歩く平次が尋ねた。

「杯戸駅の近くの居酒屋だ。」

「何で居酒屋に行くんや？」

「山江さんと川森さんが最近、その居酒屋に行ったみたいなんだ。会社の人達とな…。」

コナンは表情を変えずに言った。

「なるほどな…。もしかしたらなんか分かるかもしれへんちゅうわけやな。」

平次は少し笑みを見せた。

「ああ…。」

コナンはさらりと言った。

第16章　く引き返せない事く

東都環状線に乗ったコナンと平次は杯戸駅で降り、山江と川森達が行った居酒屋に向かって歩いていった。杯戸駅から歩いて3分ぐらいの場所に居酒屋があった。駅から近くてこの居酒屋に来る客は少ない。

「此処だな…。」

コナンは居酒屋の前に立ち止まって言った。

「ほな、入るで…。」

平次はそう言い、居酒屋のドアを開けた。ドアの開く音がして居酒屋の従業員がドアの方を見た。

「あのー、まだ営業してないんですけど…。」

従業員がコナン達に言った。

「俺らは此処に食べに来たんとちゃう。ちょっと聞きたい事があつて来たんや。」

平次が従業員に説明した。

「え、何ですか？聞きたい事って…？」

従業員がコナンと平次に近付きながら尋ねた。

「山江琢磨さんと川森宏さんがこの居酒屋に来たよね？」

コナンは幼い表情を見せた。

「ああ…、その事か。この前も警察が来たな。」

「その警察で話した事、俺らにも話してくれへんか？」
平次が従業員に尋ねた。

「えーと、警察は山江琢磨さん達が此処に飲みに来た時の事を詳しく話してほしいと言われて聞きにきたな。」

「それで…？」

平次が少し急かす様に尋ねた。

「俺も仕事をしてたからあんまり良く分からないですけど、会社の人達と楽しそうに難しい話をしていましたよ。」

「じゃあさ、山江さんと川森さんに何か変わった様子とかなかった？」

コナンが従業員に尋ねた。

「変わった様子はなかったけど、会社の人達と離れて10分ぐらい二人で飲んだな。その時、山江って人が酒を飲みながら『俺は裏を知ってしまった』とか何とか言っていました。」

「何や、裏を知ってしまったって？」

平次が従業員に尋ねた。

「さあ、私には分かりません。川森って人がその事を質問してましたが答えてもらってませんでした。でも、その後で山江って人が『知ってしまった以上…、引き返せない』って小さな声で言っていました。」

「それ以外はなんか言ってへんかったんか？」

「俺が聞いたのはそれぐらいです…。でも、何であんた達がこんな事を聞きたいんだ？ あんた達、警察じゃないだろう？」

「いや…、それは…。」

平次は従業員の質問に戸惑った。

「僕たちは山江さんの知り合いなんだ。だから、山江さんが此処に来たから何をしてたかなって尋ねたんだ。」
コナンはごまかす様に言った。

「そうや、そうや…。俺らは知り合いなんや。」

「ふーん、そうなんだ。けど、山江って人の知り合いは良く来るな。」

従業員が納得した様に呟いた。

「え、どういう事？」

コナンは従業員に尋ねた。

「実はこの前も知り合いって言ってあんた達と同じ話をしたんだ。」

第17章　　く推測く

「実はこの前も知り合いって言ってあんた達と同じ話をしたんだ。」
従業員がコナンと平次にそう言った。

「……………!!」

コナンと平次は驚いた顔をした。

「それ、何時や？」

平次が声を上げて尋ねた。

「確か…、警察が来てから3日後ぐらいだったかな。」
従業員が思い出しながら言った。

「顔は見たの…？」

コナンは真剣な顔で従業員に尋ねた。

「いや…、見てない。帽子とサングラスをしてたから…。けど、声からして男だと思う…。両方とも。」

「両方ちゅう事は二人組やったちゅうわけやな。」
平次が手をポケットに入れた。

「それで、その二人はどうしたの？」

「話が終わると直ぐに出て行きましたよ。」

「……………」

コナンは黙って何かを考えた。

「ごめんな…蘭ちゃん。平次迷惑かけてへん？」

電話口から和葉の謝る声が聞こえて来た。

「お父さんは何も言ってないし、コナン君は嬉しそうだから…、大丈夫だよ。」

蘭は携帯で和葉と話している。

「本当にごめんな…。平次に早く帰って来いって言うといてくれへん。」

「うん…、分かった。じゃあ、和葉ちゃんまたね。」

蘭はそう言い、携帯電話を切った。

「…で、どう思う工藤？さっきの言葉…？」

居酒屋を出たコナンと平次は歩道を歩いている。

「『裏を知ってしまった』って言葉と『知ってしまった以上…、引き返せない』って言葉か？」

コナンは確認する様に尋ねた。

「そうや…。」

「あの言葉から推測すると、山江さんは何かを知ってしまったって事だ。それに、裏や引き返せないって言葉からもしかしたら危険な何かを知ってしまったって事かも知れねえな。」

「居酒屋に現れた二人組が犯人やろか？」

「可能性は高いな。そう二人組は川森さんが殺されたマンションにも現れてたからな。」

「山江さんを殺したのもその二人組かもしれへんな。」
平次は手をポケットに入れた。

「ああ…、山江さんが知ってしまった事がその二人組に関係する事なら可能性はあるな。そして、山江さんと親しかった川森さんも…。」

「うわあ…。」

「危ない…。」

コナンと平次が歩く歩道の後ろから声が聞こえて来た。

第18章　　謎の襲来

「うわぁ…！」

「危ない…！」

コナンと平次が歩く歩道の後ろから声が聞こえて来た。

「なんや…？」

平次は立ち止まって後ろを振り向いた。続けてコナンも立ち止まって後ろを振り向いた。後ろを振り返ると、3台のバイクが歩道を走ってコナンと平次に向かって来た。

「こら！お前らバイク乗るんやったら車道を走れ。」

平次がバイクを運転する人達に向かって大きな声で言った。平次がそう言った途端、バイクを運転する人達が拳銃をポケットから出してコナンと平次に向けた。

「（拳銃…！）」

コナンは顔付きが変わった。

「服部、逃げるぞ…。」

コナンはそう言うのと、横の道を曲がった。平次もそれに続いて曲がった。

横の道を曲がったコナンと平次は全速力で走っている。すると、後ろからバイクの音が聞こえて来た。コナンと平次は走りながら一瞬、後ろを振り向いた。

「あいつら、俺らを狙ってるで…。」

「（くそ…！何で、俺達を…。）」

コナンと平次はバイクに追い付かれないように走ってる。

「服部、左に曲がれ。」

コナンはそう言い、左の角を曲がった。平次もそれに続いて曲がろうとした瞬間、

バァン…、

バイクを運転する人物が拳銃を発砲した。発砲した弾丸は平次には当たらず、コンクリートの壁に当たった。

左の道に曲がったコナンと平次の後ろには執拗にバイクが追ってくる。

「諦めない奴らやな…。」

平次は走りながら呆れた声を出した。

「……………」

コナンは真剣な表情で走ってる。

コナンと平次が次の曲がり角に近付いた時、コナンと平次の目の前から1台のバイクが近付いて来た。

「…挟み撃ちか。」

コナンは立ち止まって後ろを見た。後ろからはバイクが迫って来ていた。

「工藤、こっちや…。」

平次は右の角を曲がった。コナンも平次に続いて曲がった。しかし、その道は行き止まりだった。

「行き止まりや…。」

平次はそう言い後ろを振り向くと、自分達を追って来たバイクが止まっていた。止まっていたバイクからヘルメットを被った者達がバイクから降りて、コナンと平次に拳銃を向けた。

第19章　　危機一髪

「どうする、工藤？状況はやばいで…。」

平次はコナンに聞こえるぐらいの声で尋ねた。

「…奴等は拳銃を持ってる以上、下手な動きは出来ねえ。」

コナンは真剣な目でヘルメットを被った者達を見ている。

「けど、このままやと危険やで…。」

「（どうする？道は行き止まり、逃げる道はあいつらをどうにかしねえと…。）」

コナンは辺りを少し見回した。

「こら！そこで何してるの？」

ヘルメットを被った者達の後ろから女性の怒る声が聞こえて来た。

ヘルメットを被った者達は後ろを振り向いた。そこには一人の女性が立っていた。

「さっき歩道をバイクで走ってたのは貴方達ね？今、警察を呼ぶわ。」

女性はそう言い、ポケットから携帯を出した。ヘルメットを被った一人が他の者に合図した。合図をすると一斉にバイクに乗り、バイクを発進させた。

「ちょ、ちょっと待ちなさい…。」

女性は大きな声で言ったが、バイクはあっという間に視界から消え

た。

「すまん…、助かったわ。」

コナンと平次が女性に近付いて来た。

「貴方達大丈夫？怪我とかしてない？」

女性が心配そうに尋ねた。

「うん、大丈夫だよ。」

コナンは女性に笑顔を見せた。女性は少し安心した顔をした。

「おーい、大丈夫かい？」

その時、高木と佐藤が走ってコナンと平次に近付いて来た。

「高木刑事、佐藤刑事どうしたの？」

コナンは高木と佐藤に尋ねた。

「君達がバイクに乗った人達に追われてたから心配で追いかけて来たんだ。」

高木がコナンの質問に答えた。

「じゃあ、私はこれで…。」

女性はそう言い、コナン達から離れて行った。

「それで…、どうして追われてたの？」

今度は佐藤がコナンと平次に尋ねた。

「居酒屋を出たら急にバイクに乗った人達が拳銃で襲って来たんや。」

」
平次が佐藤の質問に答えた。

「……………」
佐藤と高木は少し驚いた表情を見せた。

「毛利さんは今は何処に？」
佐藤が少し表情を変えて尋ねた。

「おじさんなら事務所に居ると思うよ。」

「じゃあ、今から事務所に向かいましょう。高木君、警部に電話して探偵事務所に来てもらって…。」

「分かりました…。」
高木はそう言い、ポケットから携帯を出した。

第20章　中止の理由

「何だって！変な奴等に襲われた。」

小五郎が事情を聞いて驚いた。事務所に帰って来たコナンと平次は襲われた事を小五郎に話した。

「でも、怪我がなくて良かった。」

蘭が安心したように言った。

「…それで、何でお前達が居るんだ？」

小五郎はコナンと平次に付いて来た高木と佐藤に尋ねた。

「あ、それは毛利さんに話があつて…。」

「え、俺に…？」

小五郎は自分の指で自分を指した。その時、探偵事務所のドアが開いて目暮が事務所に入って来た。

「警部殿、どうしたんですか？」

「コナン君と服部君が襲われたって聞いてな…。それより毛利君、話があるんだ。」

目暮は真剣な表情をした。

東都オフィスカンパニーの内部の一部屋は端から端まで見えないくらい広い。社員はその大きな部屋でパソコンをしたり、会議をしたりしている。5階フロアの一部屋に田部が居る。彼はこの部屋の部長だ。山江と川森も此処で仕事をしていた。

「田部部長、佐伯社長が直ぐに社長室に来てくれとの事です。」
一人の女性社員が田部に伝えた。

「分かった。直ぐに向かうと伝えてくれ。」
田部はそう言い、椅子から立ち上がって部屋から出て行った。

「：実は私と高木君があそこに居たのはコナン君達が入った居酒屋に用があつたのよ。」

最初に佐藤が口を開いた。

「じゃあ、あんたらはあの杯戸公園で起こった事件を追ってるって訳やな。」

「ちょっと待て…。捜査は中止したんじゃない。」

小五郎が言葉を遮った。

「捜査は中止になった。だから今、我々は極秘に捜査を行っている。目暮がコナン達にそう言った。」

「でも、どうして中止したの？事件はまだ、解決してないよね？」
コナンが目暮に尋ねた。

「中止したのは…、警察上層部の命令だ。」
目暮が険しい表情を見せた。

第21章 く裏に待つものとはく

「中止したのは…、警察上層部の命令だ。」

目暮が険しい表情を見せた。

「警察上層部は何故、中止したんですか？」

小五郎は目暮に尋ねた。

「それは分からん…。警察上層部の命令って聞かされたのは松本管理官からなんだ。」

「じゃあ、松本管理官は中止した理由を知ってるって訳ですか？」
更に小五郎が目暮に尋ねた。

「いや…、管理官も理由は聞かされてないようだ。」

「警察上層部が捜査を中止させたのは…、この事件に警察が関わってるかもしれへんな。」

平次が突然、口を開いて言った。

「警察が殺人事件に関わるわけねえだろう。」

小五郎が声を上げて言った。

「いや…、そうとも限らん。実は捜査中止って言われてから佐藤君達と極秘に捜査をしていたら…、高木君が何者かに襲われそうになったんだ。何とか逃れられたけど…。しかし、その後に我々がこの事件を極秘で捜査している事が警察上層部にばれてしまった。」

「なるほどな…、あんたを襲った犯人が警察と関係があるちゅう訳やな。」

「……………」

目暮は黙って頷いた。

「しかし警部殿、どうして今になって話してくれたんですか？」

「コナン君と服部君が襲われそうになったからだ。多分、犯人は高木君を襲うとした人物だろう。だから、犯人は事件を捜査している毛利君や蘭君にも危険が及ぶ。」

目暮は真剣な声で話した。

「え、私にも…？」

蘭が驚いた表情を見せた。

「それで、我々が蘭君達を守る事になった。蘭君達が犯人に狙われていると分かれば管理官も了承してくれるだろう。」

目暮警部達が帰ってから蘭は夕飯の支度を始め、小五郎はリビングでテレビを見ている。コナンと平次は少し離れた所で小五郎に聞かれない様に何かを話している。

「山江さんが知った事って警察上層部のなんかを知ってしまったから殺されたのかな？」

平次が小声でコナンに尋ねた。

「可能性はあるな…。もし、その知った事が警察にとって表に出てはならない事なら捜査を中止にするだろうな。」

コナンも小声で話した。

「じゃあ、俺らを襲ったのも捜査を阻止するためか。」

「…かも知れねえな。もしかしたら犯人も警察内部に居るかもしれねえ。」

コナンは真剣な顔をした。

第22章　　爆発

翌日、探偵事務所に高木達がやって来た。コナン達を警護する為にやって来た。コナンと蘭は学校に行くので高木と佐藤が同行した。小五郎と平次には目暮が付く事になった。蘭には佐藤が付き、コナンには高木が付いた。

「：で、どうして高木刑事が付いて来てるの？」

コナンの横を歩く哀が尋ねた。

「ちょっとな：。」

コナンは曖昧に答えた。

「また、何か変な事件に首突っ込んでるんでしょう？」

哀が呆れた顔で尋ねた。コナンは苦笑いをした。

「コナン君、哀ちゃん遅れるよ。」

コナンと哀の前を歩く歩美の声が聞こえて来た。コナンと哀は歩くスピードを上げた。

帝丹小学校には今日も生徒達が元気良く学校に来ていた。校門の前には先生が立ち、生徒達に挨拶している。生徒達は先生に元気良く挨拶して学校に入って行く。コナン達も先生に挨拶し、校門をくぐり抜けて下駄箱に向かう為歩いていた。

ドオン…、

爆発音が校庭内から響いた。

「なに？今の大きな音？」

歩美が驚きながら尋ねた。

「何かが爆発したみたいですよ。」

光彦が辺りを見回した。辺りを見回すと生徒達が動揺している。

「そういえばコナンは？」

元太が歩美達に尋ねた。

「あれ、居なくなってる。」

歩美が辺りを見回した。コナンは辺りには居なかった。

体育館の裏はさっきの爆発で何本かの木が燃えていた。

「とにかく、警部に報告しないと…。」

高木はそう言い、ポケットから携帯を出した。

「（これも犯人の仕業なのか？）」

コナンは険しい表情をしながら燃えている木を見ていた。

第23章　　警告

15分ぐらいして警察が帝丹小学校にやって来た。爆弾が他にも仕掛けられてる可能性があるから先生や生徒達は校庭に集められた。校舎内を今は爆発物処理班が爆弾を探してる。校門の前ではコナン達が集まっている。

「コナン君と高木君の話からすると、突然校庭内から爆発音が聞こえて来たって訳ね。」

佐藤が目暮達に聞こえる様に言った。

「使われた爆弾はプラスチック爆弾です。爆弾は遠隔操作で爆発出来る仕組みになっていました。」

白鳥警部が目暮に報告した。

「爆発した所が体育館の裏だったので怪我をした人は居ませんでした。」

次に千葉が目暮に報告した。

「そうか…。」

目暮が独り言の様に呟いた。

「しかし、何で学校に爆弾なんか…。」

小五郎が腕を組みながら考えた。

「学校に爆弾を仕掛けたのはやっぱり…。」

高木は言葉を止めた。

「この事件の犯人かもしれないね。」
コナンが真剣な表情をしながら言った。

「松本管理官、爆弾を仕掛けたのがこの事件の犯人ならもうちよつと被害者が出てたかも知れないんです。捜査を再開させて下さい。」
目暮が横に居る松本に頼んだ。

「駄目だ…。上層部の命令は無視出来ない。」
松本は冷淡な口調で言った。

「この爆発は最初から誰かを狙った犯行とちゃうで…。」
平次が目暮達に言った。

「どういう事だね？服部君…。」
目暮は平次に近付いて尋ねた。

「誰かを殺すんやったら教室の中とかを狙う筈や。けど、仕掛けられとったのが体育館の裏や。体育館の裏なんて人があんまりおれへん場所や。そんな場所を狙ったのは警察や俺らに対する警告や。」
平次が淡々と話した。目暮達は少し驚いた表情見せた。

「（そう…、これは警告だ。これ以上捜査をすると命は無いってところだろう。けど、このままじゃ何時殺されてもおかしくない。しかし、警察内部に事件と関わりがあるのなら捜査しようが…。まてよ…、あいつなら何か分かるかも知れねえ。）」
コナンは少し笑みを浮かべた。

第24章　くもう一人の探偵く

帝丹小学校にあった爆弾は体育館の裏で爆発した爆弾だけだった。それ以外は見つからなかった。授業は中止となり、生徒達は家に帰された。コナン達も家に帰る為歩いていた。

「やっぱりあの爆発は俺らに対する警告やったんやな。」
平次が歩きながら言った。

「ああ…。これ以上、捜査したら命は無いってところだろう。」
コナンはさらりと言った。

「けど工藤、あの学校に爆弾仕掛けたって事はお前があの学校に行ってるって事を知ってるって訳やな。」

「…だろうな。そうになると、蘭の事やおっちゃんの事も調べてる筈だぜ。」

「どうするんや工藤？このままじゃ危険やで…。」
平次が心配そうな顔した。

「何とかして早く事件を解決しなきゃな…。それで服部、明日付き合ってくれねえか？」

「別に構わへんけど…、何でや？」

「ちょっとある人物に会いに行くんだよ。」
コナンは笑顔を平次に見せた。

翌日、コナンと平次は警視庁に来ていた。

「なあ工藤、警視庁に用があるんか？」

平次は少し退屈そうな声を出した。

「警視庁に用はねえよ。此処で待ってたらあいつが来るんだ。」

「あいつって誰や…？」

「お前も一度は会ってるぜ。」

コナンは辺りを見回しながら言った。その時、誰かがコナンと平次に近付き、立ち止まった。

「これはこれは…、服部平次君じゃないですか。」

コナンと平次の背後から声が聞こえて来た。コナンと平次は後ろを振り向いた。

「あ、お前…、誰やったけ？」

平次がその人物に指を指した。

「……………」

その人物は苦笑いをした。

「久しぶりだね、白馬の兄ちゃん。」

コナンは白馬探に笑みを見せた。

「ええ…、そうですね。探偵甲子園以来ですね。」

「思い出した…。お前、探偵甲子園の時におった白馬探や。」

平次がやっと思ひ出して声を上げた。

「やっと思ひ出しましたか…。それで、僕に話があるって…。」

「うん、ちょっと聞きたい事があるんだ。」

「じゃあ、僕が知ってる喫茶店でも行きましょう。」

探はそう言い、出口に向かって歩き出した。

「工藤、お前が待ち合わせしてた奴ってあいつか？」

平次が探に聞こえない様にコナンに尋ねた。

「ああ…、あいつの父親は警視総監。もしかしたら、事件に関する手掛かりが見つかるかもしれねえと思ってな…。」

コナンは平次にそう言った。

第25章　く圧力く

警視庁から2分ぐらい離れた所に喫茶店がある。喫茶店内は客が数人しか居なかった。コナン達は窓側の席に座り、コーヒーを頼んだ。

「それで、僕に話があるんじゃないんですか？」

注文したコーヒーを一口飲んで探が尋ねた。

「そうや…。杯戸公園の事件知ってるやろ？俺らはその事件を捜査してるんや…。」

探の質問に平次が答えた。

「ああ…。あの事件ですか。しかし、奇遇ですね。僕もその事件を調べていたんです。」

「…警察上層部が事件の捜査を中止したから？」
今度はコナンが探に尋ねた。

「ええ…。そうです。この事件はまだ解決もしてないし、捜査をしてから日が浅いのに捜査を中止するから引っ掛かってね…。」

「けど、捜査を中止させたんはお前の親父とちゃうんか？」

「確かに…。捜査を中止させたんは僕の父です。けど、誰かが父に圧力をかけて来たんです。」
探は少し表情を変えた。

「圧力って外部から…？」

「そうです…。」

「誰なんや？ 圧力かけて来た奴？」

「それは分かりません。聞けたのはそこまでです。」
その言葉を聞いて平次が少しがっかりした。

「でも、その圧力をかけて来た人が今回の事件の犯人かも知れませんが。」

「警視庁に圧力かけて来るって事は相当な権力を持つてる人かもしれないね。」

コナンがさらりと呟いた。

「それともう一つ、怪盗キッドが最近誰かに狙われているみたいです。」

「キッドが…。」

「この事件とキッドがなんか関係あるんか？」
平次が疑問に思い探に尋ねた。

「キッドが狙われ始めたのが東都オフィスカンパニーの井上会長が所有する宝石を盗んでからなんだ。」

「じゃあ、その宝石に何かあるってこと？」
コナンはコーヒーを一口飲んだ。

「いや…、宝石は数日後に井上会長の元に戻ってる。」

「つまり、キッドは盗みに入った時に何かあったんやな？」

平次が確認する様に尋ねた。

「僕はそう睨んでいるつもりだよ…。じゃあ、僕はそろそろ行かないと行けないんで…。」

探はそう言い、椅子から立ち上がった。

「また、何か分かったら連絡します。」

探はそう言い、店から出て行った。

第26章　　重要な手掛かり

喫茶店で探と別れたコナンと平次は喫茶店を出て、歩いていた。

「まさか、警視庁に圧力かけて来た奴がおるとはな。」
平次が腕を組みながら歩いている。

「警察内部の犯行の可能性は少なくなった。」
コナンは真剣な顔をしている。

「そうやな…。けど、犯行が誰なんか分からへんで。それにや、キッドもなんか事件に関わってるみたいやし…。」

「ああ…。もしかしたらこの事件の裏には巨大な何かがあるかもしれないねえな。」

「工藤、これからどうする？」
平次が立ち止まって尋ねた。

「そうだな…。山江さんの家に行ってみるか。もしかしたら、何か手掛かりがあるかもしれないな。」
コナンが提案する様に言った。

「今日はどうしたの？コナン君…。」

美香はテーブルの上にジュースが入ったコップを二つ置いた。

「小五郎おじさんが美香さんにまた、話を聞いて来てくれって言われて来たんだ。」

「そちらの人は…？」

美香は平次の方を見た。

「僕の知り合いのお兄さんで、小五郎おじさんの助手なんだ。」
コナンが美香に説明した。

「服部平次や…。よろしゅうな。」

平次が美香に挨拶した。

「実は今度毛利さんが家に来た時に渡そうと思ってたんですけど…、コナン君から毛利さんに渡してもらえるかしら？」

「うん…。けど、渡す物ってなに？」

コナンが美香に尋ねた。美香はポケットからUSBメモリーを出した。

「USBメモリーやんか。これがどうしたんや？」

平次が美香に尋ねた。

「これが主人の部屋の机の隙間にあったんです。」

「……………!!」

コナンと平次は驚いた表情をした。

「ねえ、このUSBメモリー借りて良いんだね？」
コナンが確認する様に尋ねた。

「ええ…、事件の捜査に役立つと良いんですけど。」
美香はコナンと平次にそう言った。

第27章　くデータの行方く

山江家を後にしたコナンと平次は米花町に戻って来た。

「そのUSBメモリーになんか手掛かりあるのかな？」

平次がコナンが持つてるUSBメモリーを見ながら言った。

「多分な…。警察はこれを見つける事は出来なかったみてえだ。」
コナンはUSBメモリーをポケットの中に入れた。

「しかし、何で隠してたんや？」

「犯人に見つかってはいけなかったんじゃないか。」

「そうか…。犯人に見つかったら隠滅させられる可能性があるわけやな。」

平次が納得した様に言った。その時、コナンと平次の目の前を歩いていた男性が本を10冊以上を落とした。何冊かがコナンと平次の所まで落ちた。コナンと平次は落ちた本を拾った。

「これ、あんたが落としたんやろ？」

コナンと平次は男性に近付いて尋ねた。

「ああ…。ありがとう。」

男性は近くに落ちた本を拾いながら御礼を言った。

「これ全部、お兄さんの？」

コナンは男性に本を渡しながら尋ねた。

「そうだよ…。拾ってくれてありがとう。」
男性は御礼を言い、本を持って歩いて言った。コナンと平次は探偵事務所に向かって歩き出した。

東都オフィスカンパニーの28階に佐伯社長の部屋がある。今、佐伯社長の部屋には佐伯社長と田部部長が居る。

「例の物はまだ見つかってないのか？」

佐伯は窓から外を見ている。

「はい…。やっぱり無いんじゃないんですか？パソコンのデータは全て消しましたし、机の中も調べましたけど…。ありませんでした。」

「いや…。絶対にデータのコピーが何処かにある筈だ。」
佐伯はさらりと言った。

「しかし、山江の家からも川森の家から何も出て来て無いって警察

が言ってますし、それに…あの有名な探偵を狙っても意味が無いと思いますけど…。」

「田部君、あのデータがもしも世間に公表されたらこの会社は破滅だ。」

佐伯はそう言い、ポケットから煙草を出した。

第28章　く見え始めた真相く

翌日、コナンと平次は阿笠博士の家に来ていた。

「…それで、何しに来たの？」

ソファーに座って雑誌を読んでいる哀が尋ねた。

「ちょっとパソコンを借りたくてな…。」

コナンはそう言い、パソコンの椅子に座った。

「服部君は今日はどうしたんじゃ？」

博士はコナンと平次にジュースが入ったコップを渡した。

「ちょっとな…。」

平次は博士からコップを受け取った。コナンはUSBメモリーを差し込みパソコンを起動した。

「そのUSBメモリーに何かあるのかね？」

博士がパソコンを覗きながらコナンに尋ねた。

「ああ…。」

コナンはそう言い、USBメモリーのデータにアクセスした。データにアクセスした瞬間、コナンと平次は驚いた。

「（これは……！）」

阿笠博士の家でUSBメモリーの中のデータを見た後、コナンと平次は探偵事務所に帰って来た。探偵事務所にはコナンと平次が電話して呼んだ目暮、高木、佐藤が事務所に来ていた。

「服部君、見せたい物って何だね？」
目暮が平次に尋ねた。

「これや、これや…。」
平次はそう言い、何枚かのプリントを目暮に渡した。

「これは…！」
目暮はそのプリントを見て驚いた。高木と佐藤と小五郎も横からプリントを見た。

「拳銃の密輸、麻薬の取引、裏金…。」
佐藤がそのプリントを見て言った。

「これはどうしたんだい？」
高木が平次に尋ねた。

「このUSBメモリーに入ってたデータをプリントにコピーしたんや。」

平次はポケットからUSBメモリーを出した。

「そんな物、何処で見つけたんだ？」

今度は小五郎が尋ねた。

「山江さんの家や…。それに、そのデータは東都オフィスカンパニーがやってる裏取引や…。」

「なに！」

目暮はプリントをもう一度見た。プリントには拳銃の密輸のルートや拳銃の種類や麻薬の取引相手や裏金の内容等が書かれてる。

「それと、この見てみ。」

平次はポケットから一枚のプリントを出した。そこには写真の画像が写っている。

「誰かと誰かが居ますね…。」

高木がプリントを見て言った。写真の画像には誰かと誰かが写ってる。

「その写真に写ってるんは東都オフィスカンパニーの井上会長と国会議員の三澤拓郎や。」

平次が目暮達に説明した。

「本当ですね…。それに、井上会長は三澤議員に何かを渡してますよ。」

高木がプリントされた写真に指を指した。

「それは麻薬やで…。麻薬の取引相手のリストに名前が載ってるやろ。」

「確かに…。」

目暮は確認する様に言った。

第29章　　真相への道

「つまりや、山江琢磨さんは何らかの方法で東都オフィスカンパニーの裏取引の事を知り、そのデータを手に入れた。そのデータをどうするつもりかは分からんけど…。そのデータが外部にばれたら会社は終わりや、だから犯人は山江琢磨さんを殺したんやろ。そして、山江琢磨さんと仲が良かった川森宏さんも殺したんやろ。」
平次は淡々と目暮達に話した。

「じゃあ犯人は何故、毛利さん達を狙ったんだい？」
高木が平次に尋ねた。

「多分、犯人は山江琢磨さんの奥さんが毛利のおっさんに事件の依頼をしたからや。事件の捜査をしてデータが見つかったらおしまいやからな。警視庁に捜査を中止する様に圧力をかけて来たのもおんなじ理由や…。」

「圧力って…、本当かね？」
目暮が驚いた表情を見せた。

「本当や…。」

「じゃあ、川森さんのマンションと杯戸町の居酒屋に現れた帽子とサングラスを掛けた二人組が犯人なの？」
佐藤が腕を組みながら平次に尋ねた。

「多分な…。けど、そいつらは雇われた殺し屋やろ。雇ったんは井上会長か三澤議員のどっちかやろ。」
平次が淡々と話し続けた。

「山江琢磨さんが知ってしまった裏って言うのは東都オフィスカンパニーの裏取引の事やったんや…。」

『どうします、警部？』

探偵事務所での会話の内容がイヤホンから聞こえて来る。

『とにかく、井上会長と三澤議員に会ってみよう。高木君、白鳥君と千葉君に連絡してくれ。』

目暮の声がイヤホンから聞こえて来た。

『分かりました…。』

高木の声も聞こえて来た。イヤホンで会話の内容を聞いてた人物がイヤホンを外した。その人物とは…、怪盗キッドだった。キッドはイヤホンを外して不敵な笑みを浮かべた。

第30章　　暴かれる事実

東都オフィスカンパニーの最上階は井上会長の部屋だ。井上は部屋で種類に目を通して。その時、誰かがドアをノックした。

「どうぞ…。」

井上はそう言うと、ドアが開いて目暮、高木、佐藤、コナン、平次が部屋に入った。

「何だね？ 君達は…？」

「警視庁の目暮です…。」

目暮は警察手帳を井上に見せた。

「警察が何の用だね？」

「井上会長に見て頂きたい物があります。」

「手短に済ませてくれよ。私は忙しいんだから…。」

井上は面倒そうな顔をした。高木は井上に近付いてUSBメモリーのデータをコピーしたプリントを井上に見せた。

「……………！」

井上はそのプリントを見て、驚愕した。

「これが何だね？」

「それは東都オフィスカンパニーの裏取引のデータです。」

「面白い事を言いますね…。これは貴方達がでっちあげた事じゃないんですか？」

「このデータはこのUSBメモリーに入ってたデータです。」

目暮はポケットからUSBメモリーを出した。

「このUSBメモリーは杯戸公園で殺された山江琢磨さんの家で見つかりました。もし、このデータが世間に公表されたらこの会社は終わり、それを恐れた貴方は山江琢磨さんを殺す事に決めた。」
目暮が淡々と話し出した。

「山江琢磨さんを殺す為に殺し屋を雇ったんですね。そして、仲が良かった川森宏さんも殺した。警視庁に圧力をかけたのはこのUSBメモリーを警察に渡る前に回収するつもりだった。しかし、何処を探しても見つからなかった。更に、山江琢磨さんの奥さんが探偵の毛利小五郎に事件の捜査を依頼した。その事を知った貴方は毛利さんやコナン君達を狙った…。どう？どこか間違ってる？」
目暮に続いて佐藤が話した。

「面白い推理だ…。けど、私には証拠が無い。」
井上は少し笑みを浮かべた。

「目暮警部、さっき白鳥警部から連絡があって三澤議員が井上会長と麻薬の取引をした事を認めました。あと、井上会長に頼まれて警視庁に圧力をかけた事も殺し屋を雇った事も…。」
高木が大きな声で目暮に報告した。

「井上会長、これで言い逃れは出来ませんな。」

「……………」。
井上は呆然とした表情をしていた。

最終章　〈全ての結末〉

その後、井上会長は自供した。殺し屋を雇って山江琢磨さんと川森宏さんを殺した事、コナン達を狙うように指示したのも井上会長だった。そして、事件に関わってた佐伯社長と田部部長も自供した。

「目暮警部、さっき下から連絡があって地下駐車場で数人の男が倒れている様です。」

高木は井上の部屋を調べて居る目暮に伝えた。

「なに！」

「とにかく、下に行ってみよう。」

コナンが目暮達に提案した。

東都オフィスカンパニーの地下駐車場に数人の男が倒れている。男達の手には拳銃が握られて居る。

「眠らせられてるだけみたいやな…。」
平次が男達を見て言った。

「けど、誰がこんな事を…。」
高木が腕を組みながら考えた。目暮達から少し離れた所にコナンが居る。コナンは一本の柱にカードが付いてるのに気付き、それを柱から取った。

『井上会長が雇った殺し屋を捕まえておきました。あとは警察にお任せします。』
怪盗キッド

カードにはそう書かれていた。

「（相変わらずキザな奴だな…。）」
コナンはそのカードを見て思った。

「どうしたんや？」

平次がコナンに近付いて来た。

「いや…、何でもねえよ。」

コナンはそう言い、カードをポケットに入れた。

翌日のニュースは三澤議員が逮捕された事と東都オフィスカンパニーの井上会長、佐伯社長、田部部長が逮捕されたニュースが話題になった。この事件は新聞の一面を飾った。

「今日のニュース見ましたか？」

光彦が歩きながら歩美達に尋ねた。

「なんか大きな会社の会長さん達が捕まっただよね。」

「凄かったよな…。」

歩美達の後ろをコナンと哀が歩いている。

「そのニュースの事件、貴方が巻き込まれた事件でしょ？」

「ああ…。事件解決して山江さんの奥さんがおっちゃんに感謝してたよ。」

「まあ、良かったはね。事件が解決して…。」

哀はさらりと言った。

「怒られるだけで良かったですね？」

警視庁の廊下を高木と佐藤が歩いている。

「本当…、前に減給処分受けてたから…。」

「まあ、事件が解決して良かったですね。」

高木は佐藤に笑顔を見せた。

「ええ…、良かったわね。」

佐藤も笑顔を見せた。

東都オフィスカンパニーの前には沢山のマスコミが集まっている。

「あの会社はもう終わりね。」
車の運転席に座る人物が呟いた。

「けど、無駄足だったみたい……。」
その人物は車のミラーを弄った。ミラーに映った人物はバイクで襲われたコナンと平次を助けた女性だった。女性は車を発進させた。車は段々と東都オフィスカンパニーから離れて行った。

く閉ざされた裏・完く

最終章　く全ての結末く（後書き）

こんにちは紅佐洲仮です。

『閉ざされた裏』はこれで完結です。

また、次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136e/>

閉ざされた裏

2010年10月9日07時57分発行